

る。⁴² そこで、エリサベツは喜びの声をあげ、叫び
て言うには、

「女子の数もある中で神さまはそなたを特にも可愛
く思ひ召していらつしやります。そうして、そなた
が腹のお子もそれはそれは愛しく思ひ召していらつ
しやりますよ！」⁴³ 我があるじとなるべきお方の母
さまがわたくしごとき者のところに来てくださった
とは、これはまた何ということでござりましよう
か？⁴⁴ 御覧なされ！ そなたが声がこの耳に入つ
て来たら、腹の子が喜んで、踊り跳ねております
る！」⁴⁵ 我らが御あるじなる神さまの仰せは必ずそ
のままそうなると本気でそう思つたそなたはまことに
に幸せなお方でござります！」

五・マリामの歌

⁴⁶ そこで、マリामはかく語りてござる。

「わたくしは心から

我らが御あるじなる神さまを
崇め申しております。

⁴⁷ 神さまはわたくしを

お助けなさつてくださいますから、
わたくしは嬉くて、

踊り跳ねておりまする！

⁴⁸ わたくしごとき賤のはしのために
神さまはお目をお留めくださったので、

御覧なさりませ、

孫子の代まで人は皆、

このわたくしを

幸せなやつだと言いましよう。

⁴⁹ 力ある神さまがこのわたくしに
すばらしいことをしてくださったからです。

神さまの尊さ思えば

忝なさに身が震えます。

⁵⁰ 神さまは、恐れ畏む者たちを
末の代までも慈しまれます。

⁵¹ そのみ腕のお力で

心傲^{おご}つた者たちを

追い払^{はら}つてしまわれました。

52 殿^{どの}さま方をその座^{くら}から下ろし、

下^{しも}々の者^{もの}を上座^{かみざ}に据^すえてくださりました。

53 飢^うえた者の腹^{はら}を

美味^{おい}しい物^{もの}でいっぱいにし、

金持^{かねもち}たちを空身^{からみ}で追い払いなさります。

54 僕^{しもべ}イスラエルを愛^{いと}しがり、

いつも忘れず、

かならず助^{たす}けてくださりました。

55 わたくしどもの先祖^{せんぞ}アブラハムと

子孫^{こそん}に約束^{やくそく}なされたように、

いついつまでも終わ^おりなく。」

56 かくてマリヤムは三月ほどエリサベツのもとに

留^{とど}まり、その後^{のち}、家^{うち}へ帰^{かえ}つたのでござる。

六・お水^{みづ}潜^{くぐ}らせのヨハネ生まれる

57 さて、月満ちて、エリサベツは「玉の如き」男

の子を生^うんでござる。58 隣^{りん}近^{きん}所^{しよ}の人々と親戚^{しんせき}一党

は、我^{われ}ら御^{おん}あるじなる神^{かみ}さまがエリサベツを大層

心^{こころ}にかけてくださったと聞き及び、ともどもに祝^{いわ}い

かつ喜^{よろこ}び申^{まを}してござる。

59 八日^{やっぴつ}目に、

いにしえよりのユダヤ人^{びと}の掟^{おきて}に従^{したが}い、めで

たくもその

男の子の①へのこの皮切^{かわきり}りをせんとて、人々皆集^{ひと}い

来^きたり、父^{ちち}の名^なを取りて、その子^この名^なをザカリヤと

つけようと致^{いた}してござる。60 ところが、母親^{はは}がこれ

に口^{くち}を挟^{はさ}みて、申^{まを}すには、

「さようではござりませぬ。ヨハネでなければなら
ませぬ。」

61 そこで、皆^{みな}がエリサベツに言^いうには、

天使の言葉を遮（さえぎ）って、ザカリアは言葉を失いました。天使の言葉を受け取って、マリウムも危険になりました。この当時、未婚の女性の妊娠は、「不義密通」あるいは「不倫」と呼ばれ、場合によっては死刑となります。まして、マリウムは「名家」に嫁ぐ身です。名前だけを頼りに生きる一族は、その名前の汚れを恐れます。誰かに匿（かくま）ってもらわなければ。名誉殺人の危機が迫るのです。

数日のうちに、自分の体の変化に気づいたマリウムは、急いで旅立ちました。おなかの子どもを守らなければなりません。低地にあるガリラヤの都市ナザレを出て、高地にある「ユダの町」へと進みます。そこには首都エルサレムがあり、そこには親戚エリサベツがいます。彼女だったら、守ってくれるかもしれない。

つわりの苦しみをこらえつつ、とにかくエリサベツの住む家・ザカリアの家へ、マリウムはたどり着きました。「祭司の家」です。この時代、世界中どこでも、祭司は最高権力者の一角に位置づけられています。その家に、厄介（やっかい）ごとが、持ち込まれました。頼りはひとつ。妊娠六か月の、身重のエリサベツです。彼女が理解してくれるなら、ようやく何か、可能性が拓けます。「恐れるな」との天使の言葉が、マリウムの胸に響きます。彼女はエリサベツに挨拶をしました。

その挨拶の言葉がエリサベツに届いたとき、です。なんと、エリサベツの胎の子が、おなかの中で飛び跳ねました。そしてエリサベツは霊に満たされて、大きな声で言いました。

「祝された人。すべての女性は あなたをうらやむ。

その祝福は あなたの胎の実に及ぶ。

こんなにも 素晴らしいことが どうして起こるか。
私の神・主の母上が 私の許（もと）に お越しになった。
御覧なさい。

あなたの声を 聞いたとき
私の耳に 挨拶が響き
私の胎で 赤子が躍った。

祝福された あなたは確かに
聖書の神・主の御声を聞いて
それがそのまま 実現すると
そう信じ 旅立ち ここまでやって来た
そうした人こそ 祝された方！」
するとマリアムはこう言いました。

「私の魂は
聖書の神・主の力を知って
その偉大なことを
大きな声で語ります。
私の霊は 私を救う神様に触れ
喜び踊り はしゃぎます。
確かに聖書の神・主は私を顧みて
この婢（はしため）の
低みにまでも 届かれました。

御覧なさい。
今より後、代々にわたって 皆が私を祝します。

力ある方　その大いなること　そのことが
確かに私に示されました。

その方は「聖なる方」と　呼ばれておられる。

その方は 憐み深い お方です。

その憐みは代々にわたって

その方を恐れる人に及びます。

聖書の神・主は

その御手で その御力を 示される。

心の思いに高ぶるものは

聖書の神・主の御手により 散らされる。

権力者たちは

その玉座から引きずり降ろされ

低く卑屈に生きる人々を

主は引き上げて下さるのです。

飢えて苦しむ人々を

主は良いもので満腹させて

富んでケチな人々を

手ぶらのままで追い払われます。

主はその僕（しもべ）イスラエルを助けてくださり

その憐れみを　思い起してくださいました。

私たちの父祖が聞いた　その通り

アブラハムとその子孫に、とこしえに

その憐みは　及ぶのです。

マリアムは三か月、エリサベツの所に留まりました。つまり、エリサベツは、月が満ちる直前まで、マリアムを自分の手で匿（かくま）ったのでした。そして身重のマリアムは、無事に家に帰ったのでした。

マリアの讃歌

(ルカ福音書一章四六―五五節)

ラテン語で、マ^グニ^フイ^カートで始まるために、一般にこの名で呼ばれているマリアの讃歌について、私たちはきょう、討論した。福音書のこの章は、ロシアの皇帝を驚愕させ、モラー(フランスのジャーナリスト、一八六

八五二)はマ^グニ^フイ^カートの「革命的な萌芽」について、正しく語っている。

懐胎したマリアは、同じくひとりの子供を身ごもっていた親類の女性、エリサベツを訪れる。エリサベツが救世主^{メシア}の母となるマリアを祝福すると、マリアはこの讃歌を唱え始めるのである。それは貧しき者の歌であった。ニカラグアの民衆はこの讃歌を好み、しばしばこれを祈った。つまりこれは、貧しい人々のお氣に入りの祈りなのである。迷信的な農夫たちは、しばしばこの祈りを護符のように肌身離さず持ち歩いていた。老ソモサの時代には、農民たちは彼に支持を表明するという証明書をつねに携帯することが要求されていたが、この証明書は俗にアイロニカルに、『マ^グニ^フイ^カート』と呼ばれていたくらいである。

今回は、若い娘(エスペランサ)がこの讃歌を朗読し、最初にこれについて話し出したのも女性たちだった。

わたしの魂たましいは主をあがめ、わたしの精神は救い主である神のため喜びおどっています。主がそのはした女の卑しさに、お目を止めて下さったからです。

——マリアさまは、救世主が生まれて来る、それが民衆にとって、とても大きな出来事だからというので、神を讃えていらっしやるのね。

——マリアさまは、神さまがマリアさまに与えた子が解放をもたらすということをご存知だったから、神さまのことを「救い主」と呼んでいらっしやるんだわ。

——マリアさまは喜んでおいでになる。だから、私たちも喜ばなければ。なぜって、私たちの共同体でも、救世主メシア、つまり、解放者が生まれたんですからね。

——マリアさまは解放をご存知だった……私たちもそれを認識しなければならぬわ。罪からの解放ということは、利己主義エゴイズムからの、不正からの、悲惨からの、無知からの解放ということでしょう。人間を圧迫するものすべてからの解放ということでしょう。この解放は私たちの体内にもあると、私には思えるけれど……。

最後に話したのは、つい最近、結婚したばかりのアンドレーアだった。

さて、その時、彼女の夫のオスカルが彼女を遮った。——神はエゴイストなんだ。神が欲すれば、僕たちは神の下僕、神の下女、神の奴隷にさえならなければならない。神が欲しているのは、僕たち

の服従なのさ。そんなことが許されるのは神だけなんだ。なぜ、マリアが自分のことを主のはした女と言ったのか、僕には理解できない。僕たちは自由であるべきじゃないか！　なぜ、神だけがそんなことをしていいんだ。それはエゴイズムだよ。

同じように若いアレフアンドロ。——僕は神の奴隷になりたいと思うな。だが、人間の奴隷にはなりたくない。

他の男。——神は愛なんだよ。愛の奴隷であるということは、自由だということじゃないのか。神は人を迫害したりはしないんだからね。愛こそは、僕たちがその奴隷になる価値のある唯一のものなんだ。だからと言って、僕たちが他の人間を迫害したりすることはないしね。

アレフアンドロの母親が言った。——神の奴隷になるということは、他の人々のために尽くすということじゃないのかしら。この奴隷状態は解放だと思わね。

私が言った。——オスカーが言ったような、利己的な神が存在するという意見は当たっていると思うよ。しかし、人間を創造したのは神なんだ。人間たちは神をよく、自分たちのイメージに合わせ、思い描くけれど、それは真の神ではなく、偶像であり、そんな宗教は疎外されているものなんだよ。それは実際、民衆にとっては麻薬なんだ。しかし、聖書の神は一度だって諦めなんかを語ったことはない。それどころか神は、モーセにイスラエルの民をエジプトから脱出させるように迫ってさえいる。神はイスラエルの民を植民地主義から自由へと移行させている。そして、後に神は、イスラエルの民は神に誰でも他の人間を奴隷として扱ってはならない、と命じている。なぜなら、イスラエルの民は神に

よって解放され、そのために神にのみ属する、すなわち、自由の身であるのだからと言っておられる。
 ウィリアムの妻であるテレシータ。——マリアさまがご自分をはした女とか、奴隷とか称したあの

時代に、一体、奴隷制度が行われ、存在したかということを考えなくっちゃならないわ。今日だって、他の名目のもとに奴隷制度があるんじゃないのかしら。現代ではプロレタリアートや農民たちが奴隷なんだわ。だからこそ、マリアさまはご自分の迫害をいろんな迫害から区別するために、奴隷とおっしゃったんだと思うの。現代だったら、マリアさまはご自分を、恐らくソレンチナーメのプロレタリアートの女とか農婦とかおっしゃったんじゃないかしら。

そして、ウィリアム。——しかし、彼女は主の、すなわち解放者の、エジプトにおける奴隷状態からその民を解放し給うた解放者の奴隷だと言っているんだぜ。ということはだね、マリアは自分は解放の奴隷だと言っているということになるんじゃないのか。あるいは今日的に敷衍すれば、マリアは革命的な女工か、農婦ということなんだ。

ある若い娘。——彼女は自分自身を貧しい者に属すると宣言して、神がその卑しさにお目を止められた、と言ったんだわ。だからこそ、神はマリアさまを選ばれたのよ。彼女が貧しかったからこそ。神は女王や上流階級の女性ではなくて、民衆のなかから女性を選んだのよ。神は私たちを、貧しい人々を優先させたんだわ。マリアさまもおっしゃっておいでのように、神がなされたことは「偉大なこと」なのよ。それは私たちにとっても、偉大だということだけれど……。でも、それが偉大であるということは、神が貧しい人々を通じて人間を解放したということは、お金持の人々にとっても同じ

ことだわ。

代々の人々は、わたしを、幸いさいわいの女性と呼ぶことでしょう。なぜなら、神がわたしに偉大なことをなさったからです。その御名は聖きよらかです。その慈しみは終わることなく、神の存在を信じる人々と共にあります。

女性たちのひとり。——マリアさまは、人々がマリアさまを幸福な女性ひとと呼ぶだろう、とおっしゃっていらっしゃる。マリアさまは、解放者イエスの母親だから、幸福なんだわ。それに、マリアさまは自分の子供を理解していたし、その子の使命に反対しなかったんですから、自分自身もその子と同じように解放者だわね。マリアさまは、息子たちがもしかすると解放者、自分の属する共同体の解放者に召されるかも知れないと恐れている他の母親たちと違って、息子に逆らわなかったのよ。それがマリアさまの功績だと、わたしは思うわ。

また他の女性。——マリアさまは、神さまは聖きよらかだと言ってらっしゃるけど、その意味していることは、公平だということだわ。誰をもはずかしめたりなさらず、誰にも不正を働かないということとは公平なことでしょう。神さまはそういうお方で、私たちも神さまのようでなければならぬんだわ。

私は言った。——それこそ、神の聖性の純粹に聖書的な定義だらうね。

そして私は尋ねた。——聖者たちの共同体って、一体、どんなものなんだろうか。

——そのために、僕たちが聞っているものだ——と、ラウレアーノがためらうことなく答えた。ラウレアーノは革命について語る時は、ほとんど福音書の何かに関連づけてのみ物を言う青年である。ちよつと口を閉ざした後、彼は言い添えた。——革命家を、世界中のすべての革命家を産み出すのが、共同体なんだ。

主はその御腕^{みうで}で力を用いて、おごった心の人々を散らされます。

文盲ではあるが、つねに偉大な知恵をもって語るトマス老人。——おごった心の人間って言われているのは、金持たちのことだ。金持は、自分らのことを僂^{あぐら}ら以上のものだって思い込んでますだ。彼奴らは、自分らが金を持ていて僂^{あぐら}らが金を持ていないってんで、僂^{あぐら}らを馬鹿にする。奴らは貧乏人なんて振り向きもしねえですよ。だからって、奴らが僂^{あぐら}ら以上のものだってわけでもねえ。金のことを別にすりゃあ、ね。あん人たちは金と高慢さだけは僂^{あぐら}らより持ってるだが。

他の漁師。——俺はそうじゃねえと思うな。世の中じゃあ搾^{しぼ}え目な金持だって居るし、思いあがった貧乏人だって居るですもんね。もし、俺たちが高慢ちきでなかったとしたら、俺たちの間にゃあ、なんの隙間もねえはずなんだけど……。だけどその隙間があるんだ。俺たち貧乏人だって連帯してはいねえです。

ラウレアーノ 金持が僕たちを分断するから、僕たちは連帯していないんだ。あるいは、ひとりの

貧乏人が彼奴らのように金持になりたいと思つて、金持に氣に入られようとするからだろう。するとその貧乏人だつて、内心は搾取者の心情を持つてゐることだろう。

オリヴィーフ　だからマリアさまは、内心おどつてゐる者たちについて語られたのではないかしら。お金を持っているとかいないとか、そんなことが問題になつてゐるんじゃないかと、搾取者みたいな考え方をするんじゃないかということが問題なのよ。

私は言つた。――だがね、一般的に言つて、金持が高慢で、貧しい人々がそうでないということは認めざるを得ないよ。

それに対してトマス老人。――その通りです、貧乏人は何も持つてはいやしねえだから。何を自慢したらいいかね。だから僕は言つたんだ。金持は金があるから、思い上がつてゐるんじゃないか。えかつて。それこそ僕らが持つてねえで、あん人たちが持つてゐたつたひとつのもんでしようが。財産につきものの金と誇りつてもんでしようが。

主は権力者をその座から下ろし、低い人々を高められる。飢えた人をよいもので満たして、富む人を空手でお歸しになります。

ひとりの男が言つた。――権力者つていうのは金持と同じことですね。権力者は金持だし、金持は権力を持つてゐる。

他の男。——権力があるってことは、高慢だってことだ。金持や権力者ってのは高慢なものだからな。

テレジータ 神さまは卑しい者を引き上げられる、とマリアさまはおっしゃった。神さまがマリアさまにされたことも、そのことだったんだわ。

メリータ マリアさまもイエスさまも、イエスさまに随^ついていった者も、皆、貧乏だったわねえ。私が尋ねた。——ひとりの民衆出の女性が、神は権力者をその王座から下ろし、卑しい者たちを高められ、飢えた人々をよきもので満たし、金持を空手^{から}で帰されると歌っていることを、ヘロデがもし知ったとしたら、彼はどう言っただろう？

ナタリーエは笑い、そして言った。——あの女は気が狂ったんだ、って。

ロジータ あの女はコミュニストだ、と言ったと思うわ。

ラウレアノ そんなこと言うもんか。……マリアだって、女性革命家だ、ったんだぜ！

——じゃあ、私たちがここ、ソレンチナーメで言っていることを聞いたら、ニカラグアで人はなんて言うだろうね。

幾人かの人々。——私たちをコミュニストだって言うでしょう。

誰かが尋ねた。——この「飢えた人々をよきもので満たし」ってことだけど。

ひとりの青年が答えた。——飢えた人々は、何か食べるものを手に入れることができるってことだろう。

他の男。——革命だ！

ラウレアノ　そうだ、革命だよ。金持、あるいは権力者がひきずり下ろされ、その下に居た貧しい人間たちが高められるということだ。

他の男。——神が権力者に反対というのであれば、貧しい人間の味方に違いない。

オスカールの妻、アンドレアが尋ねた。——貧しい人々がすべてよきものを持つことになるだろう、という約束は、マリアさまが生きてらしたあの時代、その当時に限って言われたことなのかしら？

それともそれは、今になって初めて果たされるってことかしら？　どちらなのか、私には解らないわ。青年たちのひとりが答えた。——マリアは未来を期してこう言ったんだと、僕は思う。なぜなら、マリアが告知した解放を、僕たちはようやくこれから目にし始めるわけだから。

主はお慈悲を忘れず、主の僕^{しもべ}イスラエルを、私たちの先祖に約束なさったように、アブラハムとその子孫とを永遠に助けて下さいました。

アレファンドロ　マリアが言っているこのイスラエルの民というのは、イエスが起こし、僕たち皆がそれに属するような新しい民ということだろうな。

ウィリアム　それは昔、この民族を安価な労働力以外の何ものでもないとして、ひどい扱いをしたエジプトの独裁者から、もうひとつの民族が解放されたように、解放さるべき民族のことだ。だが、

この民族は他の人々によつては解放され得ず、自力で自分たちを解放しなければならぬ。神はイスラエルの民を神の国に導いてはくれるが、その途上では自分たち自身でやり抜かなくてはならぬ。

オスカーが尋ねた。——金持たちから力づくで富を奪うことは許されているのだろうか？ キリストは金持たちに無理じいしたりはしなかった。彼はただ「あなたが、欲するならば……」と言っているだけだ。

私はしばらく考え込んでから、答えた。私はためらいながら言った。——彼らを国外に追放することはできるが……。

ウィリアム しかし、彼らの富を運び去ることなく。

フェリペ 彼らが財産を持ち去った方がいいさ。

最後の言葉を言ったのはメリータだった。——ここでマリアさまは、平等をたたえて歌ってらっしゃるのよ。社会的な階級のない社会を。皆がまったく平等であるような社会をたたえていらっしゃるのよ。